

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

POLE

第 88 号 2016.4.25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画株式会社 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

午後のポエジア Part6



第76回例会

朗読と
お茶の会へ
ご招待

どなたも入場無料
ケーキつき

予約不要。直接会場へ
お越しください！



2016. 6 / 4 (土)
開演 PM 2 : 00
(開場 30 分前)
北大クラーク会館 3F
国際文化交流活動室

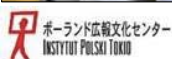


今年の《午後のポエジア》は北大祭の真っただ中、この時期北大は一番美しく、大勢の人々にぎわいます。午前中は北大祭、午後はポエジアというコースはいかがですか。

第Ⅰ部はポーランド人・日本人による詩や短歌、エッセイなどの朗読。第Ⅱ部はアトラクションの競演。笑いあり、高揚あり、感動あり。つづくお茶会は、いつも人気のポーランド人手作りのケーキのほか、サプライズもあるかもしれません。

北大祭に負けない楽しい会にしようと張り切っています。お友達を誘ってお気軽にご参加ください。

(小林暁子)



共催：ポーランド広報文化センター、後援：札幌市・札幌市教育委員会。写真は昨年、一昨年の様子。

ポ文協設立の原動力のお一人

クロー先生 追悼

小笠原 正明

2016年2月16日にポーランドの友人から「クロー教授が今朝亡くされました。享年92才でした」という簡単なメールが届きました。受け取ったのは日本時間の早朝5時で、現地ではその前日のことでした。

クロー先生 Dr. Jerzy Kroh は、ポーランド第二の都市ウッチにある工科大学の教授で、放射線化学研究所の所長であり、1970-80年代には東欧を代表する放射線化学者でした。1977年に北大工学部の吉田宏先生の研究室の客員教授として札幌で半年間家族と過ごされたのが契機となって、現地の吉田勝一さんの助けでウッチにポーランド・日本協会を設立し、その会長になりました。

そのあといくつかのルートを通じて、同種の協会を札幌にも作るようにという働きかけがあったようです。直接的には吉田宏先生が学会でウッチを訪問

されたときに「ポーランド・日本国際交流—ウッチ・札幌」と刻みこまれた立派な木皿をいただいたことが、北海道ポーランド協会設立の最後の一押しになったと聞いています。

本協会設立から6カ月後の1988年4月、ポ文協例会で「キュリー夫人の業績と生涯」という題で講演され、1994年の協会ポーランド旅行ではウッチでのイベント・歓迎会のホスト役を務められました。

最近、友人からお元気ではあるが外出はできなくなったと聞いていました。訃報を聞いて、あの善意にあふれたエネルギッシュなクロー先生の温顔を思い出しては、協会30年の歴史に思いを馳せました。心からご冥福をお祈りします。

(おがさわら まさあき)



クロー先生、1988年、筆者宅で。右は息子ジョン（ヤン）君、手前は奥さまバルバラ（アレキサンドラ）さん(2012年逝去)

北大祭インターナショナルフードフェスティバル IFF2016 に“Polski Namiot” 出店

手作りのポーランド料理はいかがですか!

2016年6月2日(木)～5日(日)9:00～21:00 (木曜は12:00～、日曜は～17:00)

北大総合博物館(北10西8)付近に出店予定

※ ポーランド人とのおしゃべり&展示を楽しむなら、平日がオススメ!

北大祭で2010年から恒例の、ポーランド人留学生のお店(テント Namiot)を今年も出します。

北大祭は毎年6月最初の週末、市民の皆さまをお迎えし、クラスやサークルの皆さんが様々なお店やイベントを催します。留学生も、インターナショナルフードフェスティバルとして、たくさんのお店で自分の国の料理を出します。

日本では普段は食べられないおいしいポーランド料理を、ぜひ食べにきてください。

4日(土)PM2:00～クラーク会館で「午後のポエジア」があります。午前は北大祭、午後はポエジアというコースはいかがですか。



北海道大学ポーランド人留学生会、協賛:ポーランド広報文化センター、後援:北海道ポーランド文化協会

《第77回例会》(第2回東京例会)

遠藤郁子ピアノリサイタル 「ショパンと私とポーランド」

2016年6月23日(木) 18:30～(開場 18:00) (演奏会)
20:00～21:00(レセプション)
ポーランド共和国大使館ホール
(東京都目黒区三田2-13-5)

参加無料、定員100名

希望者多数の場合は定員になり次第締め切らせて頂きます。また、大使館の要請でご出席のみなさまのお名前の事前登録が必要です。

つきましては、

「ご芳名と連絡先(メール・FAX・TEL いずれか)」を記して、お早めにお申し込みください。

申込先:

メール hokkaidopolandca@gmail.com

FAX 011-556-8834

携帯080-4049-0956(安藤)

申込期限: 6月9日(木)

北海道ポーランド文化協会第77回例会(第2回東京例会)

遠藤郁子

ピアノリサイタル
「ショパンと私とポーランド」

Program

Chopin
Nocturne Fis-dur Op 15-2
(夜想曲 嬰へ長調 Op 15-2)
Prelude Des-dur Op 28-15
(前奏曲 変ニ長調 Op 28-15「雨だれ」)
Nocturne cis-moll Postum
(夜想曲 嬰ハ短調 遺作)

Chopin
Etude E-dur Op 10-3
(練習曲 小長調 Op 10-3「別れの曲」)
Etude c-moll Op 10-12
(練習曲 ハ短調 Op 10-12「革命」)

Chopin
4 Mazurkas Op 24-1, 2, 3, 4
(4つのマズルカ Op 24-1, 2, 3, 4)

Chopin
Polonaise As-dur Op 53
(ポロネーズ 変イ長調 Op 53「英雄」)



主催:北海道ポーランド文化協会

共催:ポーランド広報文化センター

後援:シアターX(カイ)、日本ショパン協会、

(株)河合楽器、音響計画(株)



ポーランド広報文化センター
INSYTYT POLSKI TOKIO

このたびポーランド広報文化センターの共催をいただき、本会《第77回例会》(第2回東京例会)として、遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパンと私とポーランド」を開催できますことは、まことに喜ばしく、光栄に存じます。

遠藤郁子さんには、お母上、本会創立当初より副会長として長くご尽力いただきました遠藤道子先生以来のご縁で、長らく本会にご参加いただいています。

遠藤郁子さんのピアニストとしての世界的な名声、傑出した演奏歴、第7回ショパン国際ピアノコンクール特別銀賞をはじめとする輝かしい受賞歴は、ここで改めてご紹介するまでもないと思います(詳しくは別添のプロフィールをご覧ください)。

本企画にお力添えをいただきました、ポーランド広報文化センターのミロスワフ・ブワシチャック所長はじめ、後援を賜りました諸団体および本会東京事務所のみなさまのご尽力に厚く御礼申し上げます。

ご参加いただきますみなさまには、初夏のひとつときを心ゆくまでお楽しみいただけますようお願いいたします。

北海道ポーランド文化協会
会長 安藤 厚



恵比寿駅からポーランド共和国大使館へ徒歩 1.1 km13分

ポーランド雪像チーム「ヤロミリ」二度目の雪まつり参加

《東京のポーランド大使館からの二度目のご招待は、大きな喜びでした。ポーランド文化を日本と世界に広めるまたとない機会です、とても光栄です。

日本に着いたのはよく晴れた冷たい冬の日でした。2月3日新千歳空港に到着、敬愛する尾形芳秀さんが出迎えホテルまで案内してくださいました。

2014年の雪まつりでお会いした彫刻家たちと再会して大喜びでした。参加12チームは最初から家族のような雰囲気、雪像コンクール参加者のために今回も組織委員会が温かい歓迎パーティーを開いてくださいました。初参加のマカオ、ラトビアなど、新しいチームにもお会いしました。

大通公園での開会式のあと作業をはじめました。私たちのプロジェクトのテーマは、ポーランドの古い伝説からとった、カルコノシェの山神です。この、自然を守る心やさしい神は、自然に劣らず気まぐれで、ときには無慈悲で、ときにはやさしく慈愛に満ちています。たぶん、山々そのものと同じくらい年をとっています。

1日目は、各チームが数トンもある雪塊を削って、それぞれの彫刻のアウトラインが見えてきました。積もった雪の大きな塊とパワーショベルのみごとな作業が観光客と札幌市民の目を引きました。つづく3日間は細部の仕上げです。気候条件と、照りつける陽光のため、慎重な作業が必要でした。

私たちのチームのメンバーは、3人の彫刻家、マリア・ミシュタル、ユスティナ・グラフ、グジェゴシ・パヴウオフスキと、写真家のマウゴジャータ・マシュキェヴィチでした。尾形さんはポーランドと私たちの

町のまたとない広報家となり、毎日、私たちの彫刻に興味をもった観光客や札幌市民の皆さんに山神の物語を語り、私たちの美しい町シュクラルスカ・ポレンバのポストカードを配ってくださいました。



ついに完成した彫刻は大きな注目を集め、ポーランドとカルコノシェの山々とシュクラルスカ・ポレンバ市を広める使命を果たしました。山神を眺める人々の反応は長く忘れられません。私たちの写真家が写したさっぽろ雪まつりのまたとないイベントのビデオが、私たちの仕事の仕上げとなるでしょう。

北海道ポーランド文化協会の忘れがたい歓迎会では、安藤厚さん、久山宏一さん、小倉聖子さん、ラファウ&エディタ・ジユプカさん、ミハウ・マズール

さんなど、日本でポーランド文化に関わっている素晴らしい皆さんとお知り合いになることができました。ミロスワフ・ブワシチャック・ポーランド広報文化センター所長、ミロスワフ・ドラウス海軍大佐にはご訪問いただき、駐日ポーランド大使館ならびに広報文化センターの皆様にとくさんのご支援、お心遣いを賜りましたことに、とくに感謝申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。ポーランドから熱いご挨拶を送ります。来年またお会いしましょう。》

(ユスティナ・グラフ&マリア・ミシュタル)



(左から) Mirosław Błaszczak, Justyna Graf, Grzegorz Pawłowski, Maria Misztal & "Duch Gór"

今年の雪像のテーマはカルコノシェ山に棲む「ドゥップ・グル Duch Gór」(山神)という、ポーランド及び近隣の国々の多くの伝説やおとぎ話に登場する妖怪(鬼)で、気まぐれ巨人とも呼ばれ親しまれています。2年前は、同じく「カルコノシェ山の谷に水を注ぐ女神」という民話にもとづく雪像でした。会場を訪れた人々は、日本の民話にもみられる妖怪や山神(鬼)と重ね合わせて親しみを感じた様子でした。

雪像チームのスケジュールはたいへん過密で、朝から夜9時ころまで作業が続き、特に初日、二日目は、固く圧縮された雪の塊の荒削りの重労働で、体力を大きく消耗しました。そのためか、長旅の疲労に加えて風邪も併発し前回以上に厳しい状態でした。メンバーの体調が万全でないなか完成された雪像は称賛に値するものです。チームの健闘を称えたいと思います。(尾形芳秀)

《第74回例会報告》

久山宏一氏の講演を聞いて

越野 剛

当日は、50席ほどの小さな会場に40人近くの聴衆が集まり、ほぼ満席の盛会だった。

アンジェイ・ワイダの『灰とダイヤモンド』(1958)といえば銀幕全盛期の名作のひとつである。歳月を経た白黒の映像はこの映画が「古典」であることをいやおうなく感じさせるし、革命と戦争をめぐる深刻な政治テーマが語られるのであれば背筋をのばして観ざるをえない。しかし久山氏の講演は『灰とダイヤモンド』を撮ったワイダはまだ弱冠32歳の駆け出しの監督であり、「若々しさ」がこの作品の帯びるオーラであったことを明らかにしてくれた。

ワイダの映画が60年代の日本の若者に受けたのは、なによりもツイブルスキが演じる主人公マチュクがカッコよかったからだという。サングラスをかけ、酒場でウォッカに火をつけ、ゴミ捨て場でのたうちながら死んでいく。それらの身振りにはちゃんと理由があるのだが(黒メガネは下水道でのパルチザン

戦で目を病んだから、火酒を燃やすのは死んだ戦友の追悼のため)、そうした文脈を切り離してマチュクの演技は模倣の対象となっていく。大島渚、吉田喜重など60年代の日本映画や、ゴダールなどの外国映画から豊富な例を引いて、久山氏は当時の俳優たちが『灰とダイヤモンド』を真似、そこからカッコよさを抽出したありさまを見せてくれた。これまた若いころの大島渚がワイダについて熱く語る珍しい映像も観ることができた。

ワイダは画面の動きとモノの配置にこだわる構図絶対主義者だったという指摘も面白かった。私のような素人鑑賞者にはとても気がつきようもない点だが、疾走する列車の向きが次の場面で逆になったり、登場人物の位置関係が矛盾したりしているという。久山氏はそれを若いワイダの未熟さではなく、物理的なリアリティよりも映画という動く絵の構図の美しさを重視したからだと喝破する。

久山宏一氏はポーランドの文学と映画の専門家として知られ、大胆な仮説を豊富な引用と分かりやすい言葉で解き明かす手法には定評がある。翌日はポーランド映画祭で解説者を務めるという多忙なスケジュールのなか、本講演を引き受けてくださったことに感謝したい。(こしの ごう)

《第75回例会報告》

新井藤子氏の講演を聞いて

岩浅 武久

新井さんの講演はかなり特殊なテーマかと思われたが、土曜の午後に30人近い聴衆が集まった。

講演ではまず1900年パリ万国博覧会の映像資料が紹介された。これは確かに珍しいもので、エジソン社が撮影した「動く歩道」の動画その他のパリ万博の映像に文字どおり目を奪われた。

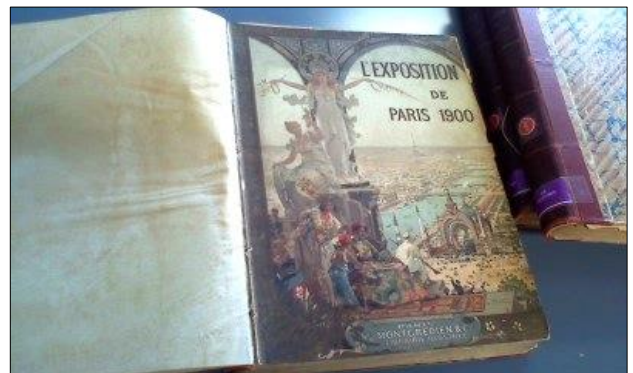
つぎに紹介されたのが、パリ万博の「ロシア・シベリア展示館」内部の写真。これは *L'Exposition de Paris* (1900) 3vol. (オリジナル版とその復刻版) で確認された「ニヴフ展示」画像と、新井さんが米国スミソニアン博物館から受領したデータで確認したステレオ写真の「ニヴフ展示」である。

それがサハリン・ニヴフの衣服や道具であるとする新井さんの推論は、画像から十分に納得できるものだった。今後の研究によって、ピウスツキがパリ万博に向けて準備した展示品のリストが解明され

たとき、パリ万博に関するピウスツキの業績の全体像とその意味も明らかになったと言えるのだろう。

パリ万博のニヴフ展示の紹介は非常に興味深く、これに関わるピウスツキの姿が目につかぶ思いがした。ただ講演案内にあった「ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか」という課題について、会場で十分にお話を聞く時間がなかったのは残念だった。

(いわあさ たけひさ)

パリ万国博覧会百科事典 *L'Exposition de Paris*, 1900 原典

第74回例会講演要旨『灰とダイヤモンド』の成立と受容

久山 宏一

1. アンジェイ・ワイダ(1926.3.6-)と三島由紀夫(1925.1.14-1970.11.25)は同世代で、ともに戦争を直接経験してはいない。三島は徴兵検査に合格したが、入隊検査ではねられ帰郷した。ワイダは自分の「最初の三本の映画は(戦争の)困難な過酷な経験が私の脇をすり抜けてしまったことに対する一種の埋め合わせなのです」と語っている(「ワイダとの対話—その意図と作品について」)。三島は45歳で自決し、ワイダは90歳の「高齢ながら矍鑠たる老人」になったが、戦後日本文学の最高傑作『金閣寺』(1956)は弱冠31歳の若者によって、ポーランド映画の最高傑作『灰とダイヤモンド』(1958)は32歳の若者によって創られたことを忘れてはならない。

2. 表題について:映画はアンジェイ・ワイダの同名の小説にもとづき、表題はノルヴェイトの詩からとった「永遠の勝利のあかつきに、灰の底ふかく／さんぜんたるダイヤモンドの残らんことを」という句に由来する。その含意は「敗北者・挫折者であるあなたは、灰になるかもしれません。しかし、そのあなたの中にもダイヤモンドが隠れているのです」という、一種の「敗北の美学」とみることができる。

3. 作品の特徴——構図絶対主義:ワイダは画面の構図を第一に考える「構図絶対主義者」といえる。シュチュカを追うマチェクがいつの間にか相手を追い抜いていたり／追われるマチェクの背後の高架線上を走る機関車の進行方向が次の場面では逆になっていたというモンタージュの誤りも、その面目躍如といえるだろう。

マチェクとシュチュカとその息子マレクが同じ方向を向く／クリスティナとマチェクの最後の出会いの場面で二人は画面上手→下手へ移動／ポーターとマチェクが画面左上へ移動など、構図・動線による「ドミナントのモンタージュ」も特徴的である。

4. 「歴史」を「現代」として描く:ワイダはこの映画で、あからさまに現代風の要素を画面に持ち込んでいる。今では1945年と1958年の風俗の差は掴みにくいかもかもしれないが、ためしに、同じ45年を描いても、俳優たちが58年の服装でカメラの前に立った『灰とダイヤモンド』のマチェクとクリスティナと、45年の服装を再現した『カティンの森』(2007)のタデウシュとエヴァとを比較してみれば、ツイブルスキの「ノンチャランス、服装、黒眼鏡、身振り」がいかにか「現代的」だったか、一目瞭然だろう。

「映画を撮り始める時、ツイブルスキはすでに準

備万端の状態にあった。朝七時にヴロツワフに現れた彼は、八時一五分、いよいよ撮影開始だという頃になっても、到着した時の服装のままだった。その頃流行っていたテニス・シューズ、細めのジーンズ、緑のジャンパー。もちろん、文句はいえたが、この世代のことは、私より彼の方がよく知っていたかもしれない(『映画と祖国と人生と…』第5章)

ツイブルスキは『灰とダイヤモンド』の前年にパリに滞在し最新のアメリカ映画を観ていて、間違いなく、マーロン・ブランド、ジェームズ・ディーンなどアクトーズ・スタジオ系の俳優に影響を受けていた。

5. 多くの模倣者たち:『灰とダイヤモンド』のあとには、数多くの模倣者たちの列がつづく。ポーランドでは、クシシュトフ・ケシロフスキ監督(1941-1996)『アマチュア』(1979)をはじめ『灰とダイヤモンド』への暗示を含む映画は10数本に上るといえる。

フランス・ヌーヴェル・ヴァーグの旗手ジャン＝リュック・ゴダール監督(1930-)『勝手にしやがれ』(1959)のラスト、主人公の逃亡と死のシーンと『灰とダイヤモンド』のラストとの類似は偶然とは思えない。

6. 日本の模倣者たち——1960年ころ:マチェクの死や、アンジェイとともにグラスのウォッカに火をつけてパルチザンの戦友を偲ぶ場面など印象的なシーンは、政治的・イデオロギー的な内容を離れて、日本でも多くの模倣者を獲得した。

(1)大島渚(1932-2013)『青春残酷物語』(1960)では、バア「クロネコ」の場面で真琴(桑野みゆき)がジンに火をつけて燃やす。ワイダ作品は日本の若者たちの間にツイブルスキ・ブームを引き起こし、真似してアルコールに火をつける者が続出した。映画中の清(川津祐介)も、そうした学生の一人である。「あんたが教えてくれたんじゃない」という真琴の台詞はそれを示している。ただし、真琴がジンに火をつけるのは恋の成就を祝うため、ワイダ作品とはまったく逆の意味である。

「個々の断片(ショット)をそれらの圧倒的(主要)な特徴によって互い連結する」「ドミナントによるモンタージュ」(エイゼンシュテイン)の手法があちこちで使われ見事な効果をあげている——クリスティナが手を引っ張られて画面の右→左へ動くショットのすぐあとに、マチェクが分厚い石壁の前を右→左へ走るショットが続く／ホテルのポーターがポーランド国旗を持って画面の左上方向に斜めに歩くショットの次の画面で、ゴミ捨て場のマチェクが右下→左

上に向かってよろめき歩く。

同様の美しさに輝くモンタージュが『青春残酷物語』のラストにもある。大島は、車に乗っている真琴と、線路ぞいの空地でリンチされる清をカットバックでみせ、清の死を直感した真琴が左を向くショットと、清の顔が左に倒れる動きを重ねてみせるという、(『勝手にしやがれ』へのオマージュも感じられる)華麗な「ドミナントのモンタージュ」を行っている。

『太陽の墓場』(1960)で、ヤス(ツイブルスキを真似て黒いサングラスをかけている)がゴミ捨て場でマチュクそっくりの死を遂げる場面については、すでに平野共余子が指摘している。ただし、その描き方は、ワイダ独特の過剰な比喻性をはぎとり、人間の死をあくまでも生物的に描いてやろうという大島の意図が感じられる。

大島はワイダ夫妻を招いて1980年に東京で行われたシンポジウムの席で、『灰とダイヤモンド』からの影響について、次のように語っている。「俳優たちも、相当の影響を受けています。私の初期の映画『青春残酷物語』とか『太陽の墓場』とかでは、男の役者が死ぬときには、だいたいみんなチブルスキーの真似をしています。私が真似をしろうといったわけではけっしてないんですが、たいていの役者がチブルスキー風にひっくりかえるんです。これは、ただかっこうだけの真似ではなくて、そういう歴史がもったある重みというものを受けとめたときには、ああいうひっくりかえりかたをしなきゃいけないんじゃないかと俳優が思ったんだろうと思います。」

(2)吉田喜重(1933-)のデビュー作『ろくでなし』(1960)の主人公北島淳(津川雅彦)が「ピストルで撃たれて、街頭をよろめきながら歩く姿」は「フランス・ヌーヴェル・ヴァーグへの共感として、『勝手にしやがれ』のラストシーンを模倣した」ものである。「それを演じた津川雅彦君はゴダールの映画を見ていましたから、ジャン=ポール・ベルモンドと同じようによろめきながら歩いた」(吉田)。注目すべきは歩いたあと崩れ落ちて牧野郁子(高千穂ひづる)に抱きかかえられるショットで、これは撃たれたシュチュカがマチュクに抱きつくシーンの模倣だろう。津川はゴダールだけではなく、ワイダの映画も見ていたようだ。その証拠は、彼が再び主演した吉田の第3作『甘い夜の果て』(1961)のラストシーンにおける、ツイブルスキの哄笑の模倣である。

7. 日本の模倣者たち——1967年以降

ズビグニェフ・ツイブルスキ(1927.11.3 生)は1967年1月8日早朝、ヴロツワフ駅でワルシャワ行きの列車に飛び乗ろうとしてホームと列車の間に落ち、轢死した。これを機に第二次ブームが起こる。

(3)藤田繁夫(敏八)(1932-1997)は大島や吉田と同世代だが、長編映画監督としての独立はいわゆる「松竹ヌーベルバーグ」に属する二人より10年近く遅れた。オリジナル・シナリオに基づく処女作『非行少年 陽の出の叫び』(1967)では、8年前に公開された『灰とダイヤモンド』からの影響が顕著で、ほとんどパロディの域に達している。

主人公の純(平田重四郎)は更生を誓って少年院を出ると、まず黒いサングラスを買いに行く。タイトルバックに、サングラス越しに太陽を見るまでのスケッチが展開する。中盤で、昔の仲間が純を待ち伏せナイフで脇腹を刺す。傷を負った純は自分の部屋に戻り、積んである古新聞紙を千切ってゴミの山を作り、その中に身を埋める。まるで主人公は死ぬならゴミ捨て場に限り、無いなら自分でゴミ捨て場を作らねばならぬと心に決めているかのようだ。

(くやま こういち、講演原稿に基づく要約)



『灰とダイヤモンド』『勝手にしやがれ』『青春残酷物語』

第75回例会講演要旨 ピウスツキと日本、北海道、先住民族

新井 藤子

この度は皆様からこの場の意義を何倍にも耕していただきましたこと、誠にありがとうございました。

講演の目的は、今後北海道を訪れる海外の方々に B・ピウスツキをいかに説明してゆくかを皆様と一緒に考えることでした。2020 年東京五輪パラリンピックを迎えるにあたり、同じ日本の一地域である北海道も海外からの視線を意識すべき時に来ていると思います。その際、自己の居住地の事物について対外的に説明できなくてよいのかという、私自身の自省的な問題提起も含んでおります。

2013 年に白老に建立された胸像は、日本国内でのピウスツキ研究の成果がいったんの結実をみたことを示す反面、ポーランド政府からの寄贈という他者の主体性を強くもちます。モニュメントは明確な伝承意図をもって次世代へ語り継がなければ、容易に経年による忘却を許してしまいます。日本では蠟管レコードで知られるピウスツキですが、蠟管は彼が先住民調査に用いたツールの一つに過ぎず、実際に成した偉業はもっと別の、さらに広い世界に関与していることをお伝えしたくもありました。

1. ピウスツキの紹介: 民族調査研究の手腕を買われ、のちに博物館活動にも多く携わりました。その第一歩として、1900 年パリ万国博覧会においてロシアの極東地方の出展品の選定を担当し、メダルを受賞するという功績も得ています。

2. 万博とオリンピック: 1900 年パリ万博の現存するモノクロ映像は YouTube で確認できますが、この時代の万博と現代の万博は、国際博覧会条約が締結された 1928 年を境に大きな違いをもちます。

この時代のオリンピックは万博の附属大会として開催され、万博とともに、教育目的をもったライバル意識の平和的利用により、国家や民族性という意識を新しい形で鮮明にしたと言えます。展示や建造物に国ごとの特色を打ち出すというコンセプトが生まれたのもこの時代です。

また、大和総研のウェブサイトのあるコラムは、20 世紀には「開発型」「国威発揚型」であった万国博覧会が、21 世紀に入って人類共通の課題の解決策を提示する「理念提唱型」に転換したことに触れ、こうした趣旨の変容がオリンピックにも及んでいると指摘しています。

3. 1900 年パリ万博の特徴: 帝国主義の文脈の下、フランスが威信をかけた万博史上最大規模の博覧会でした。会場に使用される動力はすべて電

気で、それは夜通し輝くパヴァリオン（パヴァリオン）の電飾、会場内を導く「動く歩道」などを実現しました。

万国博覧会はイギリスでは Great Exposition、フランスでは Exposition Universelle と呼ばれます。これはフランスの素案をもとに先んじて 1851 年ロンドン万博を成功させたイギリスとの違いを強調したためです。単に国際規模の博覧会という意味ではなく、宇宙的視点から地球上に存在する万物を展示し、それらがすべて一つの体系によって統合されていることを明示する、という意味を表します。施設の配置は未開（とみなされ、当時は幻想をもつてはやされました）から文明へという社会進化論的なヒエラルキーを、西→東という水平方向ではなく、文明の象徴であるエッフェル塔が植民地会場を眼下に見下ろす形で上下方向に作用させていました。

ピウスツキが選定に携わったと考えられる出展品の展示はこの構図の只中であって、当時の絵入り新聞では「無造作な展示品の配置、ワイルドなところがよい」、学術報告誌では「先住民の実状を伝えるものではない展示の多い中、大変よい展示物を取り扱っている、よくできている」と好評を得ました。

先住民の生活や文化の実状は、当時、一般人には容易には知り得ないもので、一部の探検家や研究者のみが見聞できるものでした。パリ万博を総括した当時の百科事典には、イメージのみで描出されたと思われる諸民族の挿し絵がみられます。

4. 写真資料の紹介: 1900 年パリ万博の「アジア・ロシア」セクションにおける先住民展示の写真資料です。現状では確認できませんが、ピウスツキが出展品の選定に関与した可能性が高いと考え、北大図書館、日仏会館図書室、スミソニアン博物館等から入手したものです。それらは万博の土産物用のステレオ写真（特殊スコープを通すと 3D を楽しめる左右組の写真）や、博物館資料として収蔵されているガラス乾板のネガなど、様々な形で現存しています。今後もこれらを検証してゆくことで、当時の先住民の在り方、ピウスツキとの関わりがより詳しくわかるのではないかと期待しています。

5. 写真に見える展示品の解説: 画像を拡大すると、展示品の細部や展示の構造がみえてきます。北大資料から発見した重要なキャプション部分が日仏会館やスミソニアン博物館の収蔵資料を経て鮮明に解読でき、「サハリンのギリヤーク（ニヴフ）」の人形展示が実在したことが明らかになりました。

展示品の至るところに値札の存在が認められ、日ごとに展示の配置が違えられた可能性があることもわかりました。展示された先住民の生活用品のまわりには国家の商業資源としての動物の毛皮や剥製がふんだんに敷き詰められ、ピウスツキが1898年に発表した論文にみられる先住民の暮らしの窮状からはかけ離れた様相を呈しています。

これまで製作意図がはっきりしなかった先住民の櫛の模型も、漁撈や採集などの仕事を失う冬場、シベリアの諸先住民に与えた政府伝書使(郵便事業)の仕事の様子を伝えるため、フランス国家が特に製作させたものであることが明らかになりました。

文献資料の記述によれば、ピウスツキの選定した出展品には、ニヴフだけではなくアイヌやチュクチなどのものも含まれていたようです。

6. そこから見える日本:1904年に日露戦争が勃発すると、ロシアはセントルイス万博への参加を辞退し、帝国主義の崩壊へ向かいます。一方、日本は世界進出を目指し帝国主義国家への道に踏み出しました。この時点で、パリ万博ではロシアの領土のうちに扱われたアイヌという民族名が、日本の帝国主義の下にある民族名に移行します。

7. そこから見える北海道:ピウスツキは1903年にアイヌ民族調査のために白老を訪れ、さらに平取や他地域への踏査を試みましたが、開戦が迫り、ロシア大使館から撤退の訓令が出て断念しました。交流したアイヌから人柄を信頼される一方、一般の人々からロシアの臣民とみなされ警戒されました。

8. そこから見えるアイヌ・ニヴフ:5で触れたピウスツキの論文の記述と写真資料とを突き合わせると、先住民の実状を示すかのようにみえる展示が、必ずしもそうではないことがわかります。論文には、ニヴフを窮状に追い込む開拓者や植民地主義への憤りが示され、魚の塩漬けや馬鈴薯の栽培など、ニヴフが新たな生業を確立するための応用人類学的ともいえる手助けとその顛末が記録されています。

樺太アイヌ(エンチュ)に関しては、識字学校の設立や統治規定草案の起草などを行いました。

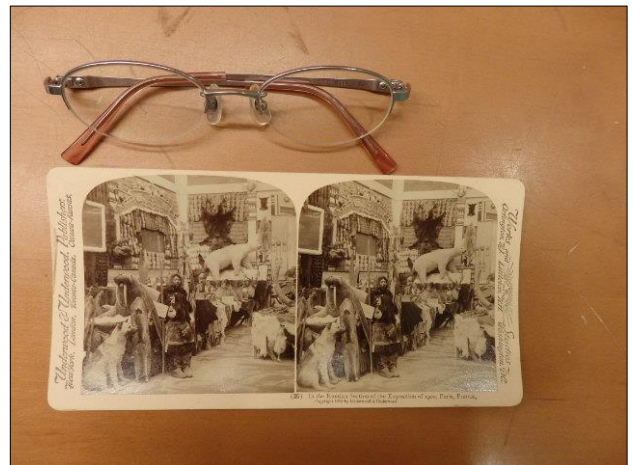
9. 結び: 今後は、学問研究により構築された人物史や、地方創生という国の政策の下で説明されるピウスツキのほかにも、道民が独自に「マイ ピウスツキ」を考えてみることで真の顕彰に繋がるのではないのでしょうか。それにより白老の胸像の取り扱いも明確に、活発になると思います。

同時に、歴史的物事を調べるために写真資料を見ることの有用性と、写真は決して見たままを物語るものではないことも改めて明らかになりました。史実を理解する際には注意が必要とも言えます。

10. 私が考える今後の顕彰のカタチ:最終的にはピウスツキの関与した民族展示を立体映像で再現したいと考えています。様々な場所への持ち運びや映写、発信が可能です。

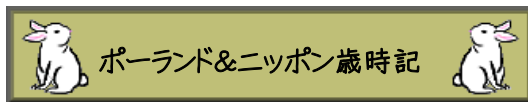
11. いただいたご指摘の一部:①立体映像での再現の際の彩色の整合性はとれるのか。推測による彩色をどう思うか。②ピウスツキは万博出展品を選定したが、パリには出向かず展示設営にも参与していない。万博における先住民展示の調査や再現が果たしてピウスツキ研究や顕彰になるのか。③ニヴフの人形が首から提げている飾りに穴開き銭やヒスイの存在が認められる。遠距離交易や装飾品としての価値のありようを見て取れる。④ピウスツキのことは蠟管レコードの一件で知っていたが、この講演に至る研究の発端は何か。

以下、応答内容を記させていただきます。①恐竜化石のような発掘物の復元展示にみられますが、十分に検討したその時点の結果を示すことも大切だと思います。②現存するピウスツキの収集資料がどのような文脈の展示構築に用いられたかを示すことは、ピウスツキの業績を視覚的に人々に伝える一つの手立てになると思います。③今後の研究の参考にさせていただきます。④蠟管レコード再生事業は、日本国内のピウスツキ研究の発端です。私はその研究過程や成果をみて育ち、今の自分の研究に至りました。(あらい ふじこ)



「ニヴフ展示」のステレオ写真(ステレオスコープ方式)

原寸は縦約9cm、横約17cmだが、写った展示品の細部やキャプションの文字を肉眼で確認できる。ステレオ写真は専用のビューアーを使ったり、裸眼で視点を工夫したりすることで被写体を立体的に見ることができ、当時は土産物として流行した。アジア・ロシアセクションの一角を示す本資料はアンダーウッド&アンダーウッド社が量産したもので、生産数、販売数は不明だが、一例として、日本セクションのステレオ写真は50~100セットほど販売された。



カルメル会研究所

ポズナン市の「聖ヴォイチェフの丘」にあるカルメル会の研究所と関わり始めて、4年目です。修道院の古い内装にもすっかり慣れました。ここに集まる面白い人々と一緒にいるのは、気分のいいものです。そして、地下室の明かり窓の下にあるヒーター脇の自分の席も気に入っています。ある時などは、蜘蛛ともその席を共にしました。

klasztorne mury
przenika chłód wiosenny
modlitwa w ciszy

沈黙や
カルメル会の
春寒さ

ポズナン市、津田モニカ
Monika Tsuda, Poznań

poranna podróż
za oknami pociągu
mgła w słońcu znika

朝陽出て
車窓の向こう
霧消える

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ
Piotr Wrzeciono, Warszawa

除夜の鐘聞かず今年も年明けける
雪しづり夢まぼろしの蝦夷地かな
つぶやくは蕪村の一句春の月

岩見沢市、霜田千代磨

短く自己紹介——ピョトル・ヴジェチョノ

私の俳句を掲載していただき、本当にありがとうございます。出版されたものは私にはとても重要です。この文学形式でのこれからの作業のモチベーションともなってくれます。

貴協会と会誌「ポーレ」のことは、長いお付き合いの津田夫妻から知りました。普段は情報学、もっと詳しく言えば、いわゆる MIR (Music Information Retrieval) に携わっています。ポズナン市の出身で、現在はワルシャワ生命科学大学 SGGW の応用情報学・数学部で准教授として働いています。

自然科学のほか、私にとってとても重要なのは、人文科学、特に音楽です。私が主に演奏している楽器はパイプオルガンですが、MIR 分野での研究対象はバイオリンです。

初めて俳句と出会ったのはまだ高校生のときで、それはチェスワフ・ミウオシュがポーランド語に訳した俳句と、自らポーランド語で作った俳句でした。

日本文化に興味を持ちはじめたのは、ポズナン工科大学での学生時代でした。主な刺激となったのは、宮崎駿の映画『千と千尋の神隠し』でした。それはとても感動的な体験で、中でも久石譲の作

曲した素晴らしい音楽が大きな役割を果たしました。

ポーランド日本協会ヴィエルコポルスカ支部で日本語を勉強しはじめ、日本の文化を知るようになりました。協会の授業で、俳句という文学形式、しかも今度はそのオリジナル版に興味を持つようになりました。俳句は私にとって自らの詩を作るためのインスピレーションとも、誘いともなりました。

ポズナン工科大学を修了したあと、ワルシャワのポーランド日本情報工科大学で博士課程を始めました。ここでも私の日本への興味が広がり、さらに自分の学術研究でも日本の学術刊行物を利用し始めました。

句作は、もっとも相応しい言葉を探す出会いです。形式は、わずか十七音だけからなるのですが、その中でとても多くのことを伝えられます。さらに俳句は、単なる言葉のみではなく、メロディでもあります。俳句を作るときには、何を伝えたいかに加えて、その詩の響きについても考えるようにしています。



《新会員のひと言》

はじめまして、前田理絵です



このたび協会のお仲間に入れていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私とポーランドとの出会いは高校生の頃。当時、海外文通が流行っており、友人がペンパルクラブに手紙を出したところ「2通来たから1通あげるよ」ともらったのがポーランド人の手紙だったのです。片言の英語で文通し、大学2年の夏、初めての海外旅行でポーランドを訪ねました。彼も家族もとても温かい人たちで、美味しい家庭料理をはじめ、まさに至れり尽くせりのおもてなしでした。

すっかりポーランドに魅せられた私はポーランド語の勉強を始め、旅行やサマースクールに行くようになり、大学を卒業後クラブに語学留学しました。

3年後帰国、幸い駐日ポーランド大使館の商務参事官室に勤めることができました。カルチャーセンターで教える機会にも恵まれ、2人の子供の出生・育児のため大使館を退職後も細々とポーランド語を続けることができました。

最近は通訳・翻訳やポーランド語講師のお話も来るようになり本当に有難い限りです。特に教える仕事は大変楽しくやりがいを感じています。「難しい」といわれるポーランド語ですが、文法を説明して理解していただき、使えるようになっていく生徒さん達の笑顔を見ると私自身も喜びと力が湧いてきます。語形変化を覚えないと使えないポーランド語ですが、覚えてしまえば楽になります。皆さん、諦めないでポーランド語を学びましょう！

(まえだ りえ)

園部真幸と申します



大学を出てから江別市で遺跡の発掘調査に従事していました。郷土資料館やセラミックアートセンターの学芸員などを経て3年前に退職、現在は非常勤職員として郷土資料館に勤務しています。

ポーランドに興味を持ったきっかけは映画です。30歳を過ぎたころ、札幌のイメージ・ガレリオ(現シアター・キノ)で『灰とダイヤモンド』(A・ワイド監督)と『夜行列車』(J・カヴァレロヴィッチ監督)を見たのが最初です。その後ホームビデオで両作品を擦り切れるほど見ましたが、『灰とダイヤモンド』は今でも青春映画の最高傑作だと思っています。

1980年に始まった「連帯」の運動にはずっと関心を寄せていました。ですから政労合意が結ばれ、新しい時代の到来が期待された矢先に戒厳令が布告され、警官がデモ隊を殴打するシーンをニュース映像で見た時はとても残念な気持ちになりました。

戒厳令を布いたのは当時の統一労働者党第一書記ヤルゼルスキですが、民主化後大統領になったワレサが、病床のヤルゼルスキを見舞っている写真を伊東孝之さんが POLE 第83号に紹介しています(本会 HP 参照)。まさにポーランドだからありえたような、「憎悪より和解」を象徴するお話です。

協会には、今後もポーランドの歴史や文化をどんどん紹介してほしいですね。今、暗い話や難しい話が敬遠される風潮にありますが、ポーランドの人々が背負ってきた重い歴史の中にこそ、日本人が学ばなければならないことが多くあると思います。

(そのべ まさき)



念願の日本・ポーランド直行便が就航

2016年1月14日ワルシャワ・シヨパン空港より成田国際空港に、待望のLOT(ロット)ポーランド航空の初便が到着しました。今までポーランドに行くにはモスクワ、ヘルシンキ、フランクフルト、パリなど経由でしたが、LOTの就航によって、日本とポーランド間のみならず、ヨーロッパへのゲートウェイが変わり、乗り継ぎの利便性が格段によくなると期待されます。

いまはまだ週3便(日・水・金曜日)ですが、いずれ毎日運航することでしょう。この就航で日本とポーランドの交流が一段と活発化されることを期待します。

日本とポーランド国交百周年(2019)に、LOTでポーランドへ行きたいですね。(尾形芳秀)



ポーランド初のアイヌ文化展

松本 照男

ワルシャワから南西 300キロのジョーリ Zory 市は、人口わずか6万の小都市ですが、1272 年に自治権を得た由緒ある街で、往時はバルト海からローマに至る琥珀街道の商業ルートとして栄えました。第二次大戦で街は破壊され、いまはわずかに中世の街の城壁の一部が残るだけの一地方都市です。

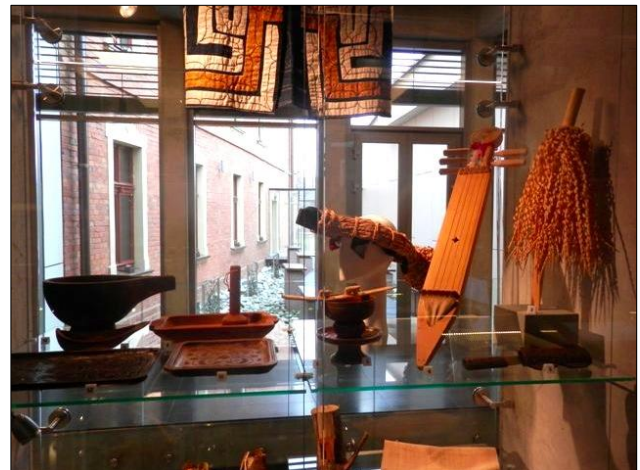
このジョーリの市立博物館 Muzeum Miejskie w Żorach のブハリック館長 Dr. Lucjan Buchalik は博物館増築の機会に『世界におけるポーランド人の活躍』という新たな展示を企画しました。展示は、三国分割時代(1795-1918)に故国を離れたり、帝政ロシアに抵抗してシベリア流刑になったりしたポーランド人たちの世界各地での研究活動とその国の文化に焦点をあてています。

そのような国の一つとして日本を考えたとき、館長はすぐにプロニスワフ・ピウスツキのアイヌ民族に関する研究業績を思い起こしたそうです。ただ、ポーランド各地の博物館にはアイヌ民族に関する文化財は皆無なので北海道に飛ぶことにして、一面識もない白老のアイヌ民族博物館にメールを送り協力をあおいだところ、その趣旨がいまひとつ理解できなかった野本正博館長から札幌在住の児玉忠征氏を通してワルシャワの松本に連絡がはいり、やっとジョーリ博物館の意図が了解されました。

2015 年6月ブハリックさんは北海道に飛来し、児玉さんと松本の二人三脚で接遇し、各地のアイヌ関連施設を訪れました。展示用には主に平取でアイヌ民具を購入し、二風谷アイヌ文化博物館の平村浩昭館長からは祭具、白老の野本館長からはアイヌ衣装をご寄贈いただき、札幌市役所のアイヌ施策課、北海道ポーランド文化協会等々からも破格の厚遇をいただき、地元メディアの取材もありました。その成果が実り、2016 年1月29日、ついに新展示のオープニングを迎えることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さらに、アイヌ文化とプロニスワフの研究業績にいたく感銘を受けた館長は、2018 年春を目処に半年間の『アイヌ文化とプロニスワフ』特別展も企画しています。この3月4日には松本がジョーリ市のソーハ市長に面談して、市としてこの特別展に全面的な支援をお願いしました。この企画が正式に動き出せば、また北海道各地のアイヌ関連施設にご協力をお願いに伺うつもりです。その節はよろしくお願ひします。
(文と写真:まつもと てるお)

2016.1.29 ジョーリ市博物館新展示オープニング:
左は筆者、中央はブハリック館長
Photo: A.Zabka



2016.1.29 ジョーリ市博物館: アイヌ文化展示

2015.6 白老
左からブハリック館長、野本館長、松本夫妻、後ろはピウスツキ像



2015.6 二風谷
右から児玉氏、平村館長、5人目学芸員補 関根健司氏



2015.6 サッポロピリカタン: 右端は札幌市アイヌ施策課生野祐光課長



The・対談

佐藤 晃一 × 氏間 多伊子



『ふたつの名前を持つ少年』をみて

～ ひとつの名前は愛を、もうひとつの名前は勇気を与えてくれた ～

氏間 昨年10月の記念誌出版祝賀会では、広報文化センターのブワシチャック所長からポーランド映画の普及にこれからも力を注ぎたいとのご挨拶がありました。恒例となった「ポーランド映画祭2015」は11月角川新宿を皮切りに全国7都市で開催され、札幌でも3作品が上映されました。『ふたつの名前をもつ少年』は独・仏映画ですが、ロケ地はすべてポーランドでしたね。

佐藤 原作は読んでおりませんが、一人の少年の数奇な運命の2年半にわたる月日を描いて魅せました。10点満点の7点と私の映画記録には記しました。北海道とほぼ同じ風土のポーランドは冬には過酷な自然となるのに、父の助言を守り、よく生き抜いたと思います。背景となる土地はドキュメンタリーを思わせる風景描写が心憎かったです。現代の《RUN BOY RUN》は以前見た『ラン・ローラ・ラン』(独)を想起させました。

氏間 実在の人物と原作者は年齢や体験も重なり、稀有な出会いをへて本を出版。監督も映画化の権利を買い取ったあと、主人公のモデルと会って話していますね。また映画の主人公の少年は、双子の兄弟がそれぞれ、アクティブなシーンと情緒的なシーンを演じ分けたと知り驚きました。一人二役ではなく二人一役とは。

佐藤 私はやや違和感をおぼえました。始めのうちはちょっと展開がわからず、困惑しました。「双子」といっても、必ずしも同一の外貌ではないので無理があったかも……。パンフレットの監督の談話

で子供を使う撮影には時間制限があるので、その制約の解決法だったとわかりましたが、制作費圧縮の効果もあったのではと思います。この点は負の評価となりましたね。

氏間 ペペ・ダンカート監督はドイツ人で、危害を加えた側がその相手の過酷な運命の実話を撮るといある種の重荷を背負っての撮影になりますが、驚愕の実話に、世界中の子どもも大人も、心に残りつつける作品になったことは確かですね。

佐藤 戦後70年の節目に上映されたのは意義があったと思います。アウシュビッツを訪れるドイツ人は、ポーランド、アメリカ、イギリス、イタリアに次いで5番目です。この映画制作もドイツ人としての贖罪ではないでしょうか。2015年は『SHOAH ショア』『ソビブル. 1943年10月14日午後4時』『不正義の果て』のランズマン3部作や『あの日のように抱きしめて』などナチス・ドイツがらみの作品をたくさん観ました。今後も『ヒトラー暗殺、13分の誤算』『顔のないヒトラーたち』『フランス組曲』などを観ようと思います。

氏間 現在、字幕なしの『SHOAH ショア』を本と併せて鑑賞中。遅々として進みませんが。シアターキノでの『顔のないヒトラーたち』2016/1/16～、『フランス組曲』1/16～は必見ですね。



(さとう こういち & うじま たいこ)



原作 ウーリー・オルレブ作『走れ、走って逃げろ』母袋夏生訳、岩波書店刊

原題 RAN BOY RUN | ドイツ・フランス | 2013年 | カラー | 108分 |

監督 ペペ・ダンカート Pepe Danquart / 1955年3月1日ドイツ、シンゲン生まれ。1968年から映画を撮り始める。1978-1991年には作家、監督、プロデューサーとして30以上のドキュメンタリーに関わり、多くの賞を受賞。2008年ハンブルグ芸術大学の映画教授となる。

キャスト アンジェイ・カクツ / カミル・カクツ / ジャネット・ハイン / ライナー・ボック

あらすじ 8歳のユダヤ人少年が身上と名前を偽ってナチス・ドイツの手を逃れ、たった一人で終戦まで3年間を生き抜いた、驚愕の実話を描いた感動作。過酷な運命の中でも変わらない少年の純粋な心と自らの運命を切り開く強さに胸打たれ、少年が出会うさまざまな大人たちの姿から、人間の残酷さと優しさを知る。美しいポーランドの四季を背景に、未来へと希望をつなぐ物語。



《ポーランドの伝説》

黒衣の公爵夫人の幽霊伝説

栗原 成郎

シャモトウウィの「黒衣の公爵夫人」の幽霊伝説は、同じヴィエルコポルスカ地方のクルニク城の「白い貴婦人」の伝説と好一対をなす(本誌第87号参照)。

シャモトウウィ Szamotuły はポズナンの北西35キロ、人口1万9千ほどの小さな町で、中心部の公園のシヴィエルチェフスキ通りに「ハルシュカの塔 Baszta Halszki」と呼ばれる煉瓦造りの高い建物がある。中世に権勢を誇った豪族の城の名残の一つである。城は1513年にポズナンの県知事ウカシュ・グルカ2世 Łukasz II Górką (1482-1542)の所有に移り、1518年にグルカはこの塔を住居兼防衛塔として建造させた。

のちに、この塔の近くで夜ごとに若い黒衣の貴婦人の姿が見られるようになったという。

第二次大戦が終って間もなく、シャモトウウィの古い住民の一人ピョートル某(なにがし)という男が、ポズナン市への出張の帰り途、夜の11時ころ塔のそばを通ると、月の光に照らされて女の姿が浮かび上がった。女は黒のラシヤの喪服を着てゆっくりと池の方角へと歩を進めていた。女がひとり公園を散歩する時刻ではなかったの、彼は驚いた。若い女性のように、どこかへ急ぐ様子もなかった。不思議に思って立ち止まると月が雲に隠れ、再び月が現れたときにはもはや誰の姿も見えなかった。

家に帰ってこの出来事を妻に話すと、妻は少しも驚かず、ただ感慨深げに、それは子どものころ話に聞いた、有名なハルシュカに違いないと言った。ピョートルの妻の両親と祖母は、特に秋、塔の周囲を歩き回るハルシュカの幽霊を何度も見たという。また塔の中から溜息と呻き声が聞こえてくるという話も聞いていた。

Jan Matejko (1838-1893) 画「スカルガの説教」(1864)より：右が若いハルシュカとされるが、画題はズィグムント3世(1566-1632)時代の出来事でハルシュカの没後であり、時代錯誤があるとも言われる。



シャモトウウィには黒衣の公爵夫人の話がさまざまなヴァージョンで伝えられている。

若い公女は御付きの小姓が好きになり、立腹した父親が娘に鉄仮面をかぶせて塔に閉じ込めたともいう。あるいは公爵夫人は不貞の妻ではなかったのに、姦通罪で残酷な刑罰を受けたともいう。

最もよく知られた伝説では、嫉妬深い夫のウカシュ・グルカ3世 Łukasz III Górką (1533-1573)が、美貌の若い妻を自分以外の男に見られないよう、妻の顔に鉄仮面をかぶせて塔に監禁したという。

ハルシュカは仮面で顔を覆ったまま地下の回廊から塔を出て、近くの教会のミサに参加し罪を告解した。陰鬱な月夜には塔の近くを告解用の衣装に身をつつんだ女が音も無く歩く姿が見られ、女が塔に姿を消すと塔の厚い壁越しに、薄幸のハルシュカの押し殺した忍び泣きの声が聞こえたという。

ハルシュカ Halszka の愛称で知られる女性は、エルジュビェタ・カタジナ・オストロクスカ Elżbieta Katarzyna Ostrogska (1539-1582)といい、公爵イリヤ・オストロクスキ Ilija Ostrogski (1510-1539)とベアタ・コシチェレツカ Beata Kościelecka (1515-1576)の娘であった。オストロクスキ家は14世紀末から16世紀にかけてリトアニア大公国で枢要な地位を占めた大貴族の一門で、西ウクライナのヴォルィニのオストロク(ポーランド語 Ostróg、ロシア語 Острогор)に居城を持ち24の都市を支配した。父イリヤはリトアニア・ポーランド連合王国内の広大な領地を治めていた。

才色兼備で知られた母ベアタは王室財務官アンヂュジェイ・コシチェレツキ Andrzej Kościelecki と宮廷女官カタジナ・テルニチャンカ Katarzyna Telniczanka の娘であったが、ズィグムント1世(老王) Zygmunt Stary (1467-1548)の婚外子であることは公然の秘密とされた。ベアタは老王の2番目の妃ボナ・スフォルツァ Bona Sforza (1494-1557、イタリア出身)に女官として仕えた。

ハルシュカは1539年にオストロクで生を享けたが、誕生前に父親は亡くなり、それが彼女の悲劇



ハルシュカの塔(左)とグルカの館
Photo: Stanisław Nowak, 2007

的運命の因(もと)となった。娘は16世紀西ヨーロッパのいくつかの公国よりも強力なポーランド・リトアニア連合王国の中でも、最大の侯国の一つである領地の莫大な資産の相続人となった。父イリヤは自分の死の近いのを予期して、生まれてくる子の正当な後見人に叔父[イリヤの腹違いの弟]のワスィル・オストロクスキ Wasył Ostrogski (1526-1608)とズィグムント2世アウグスト王 Zygmunt II August (1520-1572)を指名した。父の早すぎた死の後に生まれた女兒は絶世の美女に成長し、近隣の数多い分封侯国のどれにも勝る莫大な財産の相続人というおとぎ話のお姫様のような存在だった。

当然、ハルシュカには求婚者の群れが殺到した。中でも最も熱心な求婚者は、姫の後見人ワスィル・オストロクスキの甥、若き候ディミトル・サングウシュコ Dymitr Sanguszko だった。姫はまだ14歳で、母親のベアタはいったん求婚者に与えた結婚の約束を取り消した。だが若い侯は結婚を断念する気は毛頭なく、後見人たる叔父のワスィルと共に80人のコサクを引き連れてオストロク城を攻撃した。短い小競り合いののち城は明け渡され、ディミトルは婚約者の前に立った。急ぎ呼ばれた司祭が即席の結婚式を執り行い候と姫を結び、ワスィル公が結婚の証人になった。1553年9月6日のことだった。

しかし母ベアタはこの既成事実を承認せず、ズィグムント・アウグスト王に苦情を訴えた。ハルシュカの後見人でもある王は激怒し、ディミトルに「死刑と名誉剥奪」を言い渡した。夫は若妻を連れてボヘミアに逃亡したが、別の求婚者マルチン・ズヴォロフスキ Marcin Zworowski が一族郎党を率いて二

人を追跡し夫を殺害した。

ハルシュカはポーランドに連れ戻され、ズヴォロフスキはハプスブルク家の主権を犯したかどで神聖ローマ帝国の官憲に逮捕・投獄された。ポーランド王の直接干渉により彼も帰国はできたが、時すでに遅く、王は若き未亡人の再婚の手筈を整えていた。

ハルシュカのつぎの嫁ぎ先は、ヴィエルコポルスカの大貴族、ポズナンの知事でシャモトウウィの領主ウカシュ・グルカ3世だった。結婚式はワルシャワの王宮でポズナン司教の司式により盛大に挙行されたが、母と娘はこの王の独断専行に不服で、ルヴフの修道院に身を隠し、おそらく母親の意志で娘はリトアニアのスツキ公シエミョン・オレルコヴィチ Siemion Olelkowicz と再婚した。

これに感情を害したズィグムント・アウグスト王はハルシュカを修道院から連れ出すよう命じ、法律上の夫に引き渡した。グルカは妻をシャモトウウィに連れ帰り、彼女は1559年から1573年までそこに留まったが、王が死に夫にも先立たれると、父方の叔父ワスィル公の手で故郷ヴォルニニへ戻された。

ハルシュカは母の強い影響下にあり、徹頭徹尾母に従順な娘だった。その母も3年後に世を去る。

さらに6年後、ハルシュカは狂気のうちに43歳の生涯を閉じた。彼女の精神錯乱は三度の不本意な結婚に翻弄された悲劇的な体験に起因すると考えられる。ハルシュカの不幸な運命は、宮廷につながる母親ベアタ、叔父ワスィル公、ズィグムント・アウグスト王らの間の反目、権力争い、巨万の財産をめぐる葛藤の結果であった。(くりはら しげお)



ポーランド情報誌『エクセレントポーランド～ライジングポルスカ～もっと知りたいポーランド』3発行

ポーランド共和国大使館が全面協力した、好評のポーランド情報誌(シルバーストーン JP 刊)の今号には、東京・ワルシャワ直行便が就航した LOT(ロット)ポーランド航空のプロモーションのほか、文化面では昨年開催された第17回ショパン国際ピアノコンクールにちなんでショパン、およびタデウシュ・カントル生誕百年の特集や、シロンスクの「ヨーロッパ産業遺産の道 ERIH」が紹介されています。

今年ワルシャワで開催される「世界女性サミット」と、クラクフで開催される「ワールドユースデー」に先駆け、両都市を舞台とした大変興味深い記事もあります。

また、高円宮妃殿下、中曽根弘文(参議院日本・ポ

ーランド友好議員連盟会長)、額賀福志郎(衆議院日本・ポーランド友好議員連盟会長)、遠藤郁子(ピアニスト、当会会員)氏らも紹介されています。

本体 1,500 円。お求めは紀伊國屋書店、版元等へ。

なお、本号でも紹介されているポーランド国立民族舞踊団「シロンスク」の DVD が、ポーランド広報文化センターより当協会に寄贈されました。ご利用ください。

(尾形芳秀)



今後の予定(本号1~3ページ参照)

《後援》北大祭 IFF2016 ポーランド料理テント
 “Polski Namiot”出店、6月2日(木)~5日(日)9:00
 ~21:00、北大総合博物館付近

《第76回例会》朗読とお茶の会「午後のポエジア」
 6、6月4日(土)14:00~18:00、北大クラーク会館
 3F 国際文化交流活動室、北大祭中の開催です。
 ポーランドケーキ付、どなたも参加無料、予約不要

《第77回例会》(第2回東京例会)遠藤郁子ピアノリ
 サイタル「ショパンと私とポーランド」、6月23日(木)
 18:30 開演、ポーランド共和国大使館ホール(目黒
 区三田2-13-5)、参加無料、定員 100 名、6月9日
 (木)までに事前登録が必要

《後援》遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパン序・
 破・急・幻」、9月15日(水)19:00 開演、六花亭札
 幌本店・ふきのとうホール(北4西6)、入場料5千円

『ポーレ』原稿募集

エッセイ(旅行記、新刊紹介、映画・演劇・演奏会の
 感想)、研究(歴史、社会、経済)、俳句・詩その他な
 んでも歓迎。事務局へご連絡ください。

退会(ご芳名。敬称略)

退会:(2016.4)高橋敦子、本谷英一(以上住所不
 明)、本間富雄、山川素子、吉野悦雄

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(ご芳名)

片山明石(2016.1~3) ※1口千円、敬称略

本年度(2015.10~2016.8)年会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500 円)と、維持会費
 (任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局のATM
 扱い(手数料は無料)をお願いします(ゆうちょ口座を
 お持ちでない場合も窓口にご相談を)。

※ 納入のお願いがある場合、個別
 の文書と振替用紙を同封します。



住所変更は事務局へご連絡を!

事務局:電話・FAX 011-556-8834(安藤)
 メールhokkaidopolandca@gmail.com

目次

《第76回例会》朗読とお茶の会「午後のポエジア」6へご招待(小林暁子) 1
 ポ文協設立の原動力のお一人 クロー先生 追悼(小笠原正明) /
 北大祭 IFF2016 に“Polski Namiot”出店(北大ポーランド人留学生会) 2
 《第77回例会》(第2回東京例会)遠藤郁子ピアノリサイタル「ショパンと私とポーランド」(安藤厚) 3
 ポーランド雪像チーム「ヤロミリ」二度目の雪まつり参加(J・グラフ&M・ミシュタル、尾形芳秀) 4
 《第74回例会報告》久山宏一氏の講演を聞いて(越野剛) /
 《第75回例会報告》新井藤子氏の講演を聞いて(岩浅武久) 5
 第74回例会講演要旨 『灰とダイヤモンド』の成立と受容(久山宏一) 6
 第75回例会講演要旨 ピウスツキと日本、北海道、先住民族(新井藤子) 8
 ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿) /
 短く自己紹介(ピョトル・ヴジェチョノ) 10
 《新会員のひと言》(前田理絵、園部真幸) / 念願の日本・ポーランド直行便が就航(尾形芳秀) 11
 ポーランド初のアイヌ文化展(松本照男) 12
 『ふたつの名前を持つ少年』をみて(佐藤晃一×氏間多伊子) 13
 黒衣の公爵夫人の幽霊伝説(栗原成郎) 14
 ポーランド情報誌『エクセレントポーランド~ライジングポルスカ~
 もっと知りたいポーランド』3発行(尾形芳秀) 15

POLE

第88号 ポーレ編集委員会

氏間多伊子 / 尾形芳秀 / 栗原朋友子 / 越野剛 / ラファウ・ジェブカ